
暇人が暇になった時の暇つぶし

暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇人が暇になった時の暇つぶし

【Nコード】

N7022P

【作者名】

暇人

【あらすじ】

説明しよう

この物語は作者周辺で起こる日常的会話をおもしろおかしく書いてみたという話である

第一話『暴走』（前書き）

もう一度説明しよう

この物語は作者周辺で起こる日常的会話をおもしろおかしく書いて見ようというなんとも自己満足の塊な文章である
それを御承知の上ここを読んでほしい

第一話『暴走』

今日はハロースで啓太と遊んでた
真人は言った

「海賊王に俺はなる！」

「病院行こうかW」

啓太は冷たかった

「夢は持つべきだと思うよ？」

「なぜ海賊王？」

「ワンピースが好きだからさ！あんま見ないけどねW」

「なら見てるやつにしようよ・・・」

「それなら・・・」

ハロースで叫ぶ真人。

「俺が結婚してやんよ」

「・・・だれと？」

「さあ？」

普通の反応でした

「でもでも女の究極の幸せだよね」

「うん、おまえだれ？」

「黒江真人、探偵さ・・・」

「名探偵コナン見すぎW」

かもしれない

「見た目は大人、頭脳は子供、真実は一つとわ限らない」

「まさかのコナン全否定W」

「実際名探偵コナンより、ルパン三世派」

「言えてるW」

またハローズで叫ぶ真人。

「ふっじこちゃっん」

「なるほどふじこちゃんと結婚するのか」

「話続いてた!？」

「結婚指輪どうする? 50カラットのダイヤ?」

「高い!! でかい!!」

「でも盗むんだろ?」

「地球上にあるのか?」

「月までとんでけW」

「成層圏で燃やされるW」

若干啓太は でした。

「真人、月といえは?」

いきなり問題出された

「・・・団子?」

「はあ? セーラームーンだろ」

「まさかの二次元キター」

「どうにかしてるぜ」

啓太よ、おまえがどうにかしてる

「じゃあ、飲み物といえは?」

話変わりすぎW

「リプトン?」

「バヤリースのオレンジだろ」

それはお前だけ

「うまいよね、バヤリース」

「なあ、啓太」

「なに?」

今思った事をいつてみた

「最初の話どこいった？」

続く

次回「音楽」

フィクションです

第一話『暴走』（後書き）

感想を貰えると作者はとてつもなく喜びます
それはもう近くに座っている母親が引くぐらいに

第二話『音楽』

「よし、バンドを組もう」

真人は、声高らかにこういった

啓太は

「突然だなおい」

「Girls Dead Monster 決まりだね」

「組む事前提！？GirlsってW」

「何がおかしい？」

とりあえずメンバーを決めなければ

「俺、啓太、日向、馬塩、菜月でいこう」

「俺入ってる！？しかも女一人！？」

「じゃないとバンド組もうとは、いわないだろ」

「ぢゃあせめてみんなを呼ぼうよ」

とゆうことで、バンドを組もうとは言わずにメンバーをよんだ

日「うーいーあー」馬「ちーす」菜「きたお」

みんなきた。

真人はこういった

「今のメンツでバンド組むぞー」

「「「うん？」「」」

みんな こんな感じの顔だった

「バンド組むと言ったんだよ」

「鼻糞ほじくるな」

「とういまでん」
啓太に怒られた

とりあえず決めた事を話した
馬「了解」菜「わかった」
しかしなぜか日向だけ

「だるい、かえる」
かえっていった

「あいつシャイだからなあ」
馬塩からの情報を貰った
なるほど、どうでもいい事を教えられた

まだやることが沢山あるな
「みんななにやりたい？」

馬「俺マラカスがいい」
菜「私カスタネット」
啓「んぢやボンゴ」

みんな打楽器で
お遊戯会みたいなバンドになった
「せめてバンドらしくしてよ」

馬「ボーカルで」
啓「ギターな」
菜「ドラムがいいな」
真「残りのベースが俺だな」
決まった

次わつと

「曲は何歌う？」
「おしゃかしやま」

菜月はラッドが好きだなあ

「しかしきついぞボーカル以外」

「俺はそんなに滑舌が良くないぞ!？」

「じゃあ×」

「ええ」

批判がおこった

「でもラッドがいい」

「ほとんどがきついからラッド自体×」

「ええ」

二度目の批判がおこった

「BUMP OF CHICKENのラフ・メイカーとかわ？」

「啓太いいせんいくね。それなら歌える」

いけるんだ

しかしこれで曲がきまった

最後にきめるのわ

「どこでやる？」

「・・・」

みんな黙った

「黙らずなんかいえよ」

「「道路」」

ハモった

「迷惑すぎる。そしてドラムがあるんだぞ」

「・・・」

だから黙るなよ

なぜか急に啓太がこういった

「もうだるい、つか無理じゃね」

「ですよー」

真人はこんな顔だった

続
く

第三話『甲殻類』（前書き）

なるべく感想書いていただけると嬉しいです

第三話『甲殻類』

公園にて不意に言う真人

「よし蟹を食べに行こう」

「どこ行く？」

啓太は問いただしてきた

「北海道？」

「お前は修学旅行でいくだろ」

「先取り？」

「してどうするんだよ・・・」

確かにそうだが今むしように食べたいな、蟹

思った事を真人は言ってみた

「蟹といえば甲殻類だが他に何かがある？」

「蟹、海老、ヤドカリ、亀、ザリガニ辺りだろ」

啓太は無駄に詳しかった

「蟹、海老は食えるがヤドカリとかってうまいのか？」

「しらねえよ」

「試す？」

「ザリガニで腹壊すだろ」

「仕方ないってW」

「うん、なにが？俺の『放送禁止用語』が『放送禁止用語』で『放送禁止用語』になったらどーするのよ？」

啓太よ、汚いぞ

啓太は

「でもさあ、伊勢海老って簡単に言えばザリガニじゃね？」

まあたしかには似ているが・・・
その考えはなかった

「うん、ザリガニいけるわW」

「今から池行ってくるわ」

「ガチなう!？」

なぜ英語？

「流行語になってるし」

「わかった、とりあえず池に行ってくる」

「ごめん、いや本当に許して」

かなり謝られた

「つか伊勢海老まずくね？」

「そういや、真人ん家にあつたな、残骸」

「食ってないけど」

「いや、食い散らかしてたし」

「食ってたのみてたの？」

「見てないけど、全身バラバラだったじゃん」

あんな食べ方しない

あの食べ方をするのわ

「妹がへがちうま、いやこれはうまいを超えたやとかいいながら食
ってた」

「まさかの独り占めW」

真人の家では、よくある光景なのだが

「啓太は、高級(?)なの食ったことある？」
「ない」

無駄に大きい声で言われた

「そもそも俺ん家は基本ジャンクフード」

「この前炊飯器「24時」ってかいてあったのに米が減ってなかったな」

だからか

また無駄な情報を教えられた

「つか、よく病気にならないな」

「子供は風の子」

なんか名言はきやがった

「・・・ガキ」

「俺は今お前を殴りたい」

「だが断る！」

「バキッ！」

・・・殴られた

こつちもム力ついたので殴りかえした

・・・みぞおちに

「ぐはあ」

漫画とかによくある台詞をはいた

そのままうずくまって数分後

「真人ごめんな」

謝られた

「すぐ謝るなや」「あ、うん、ごめん」

「謝るなつて」「ごめん」

「ちよつと黙れ」「ごめん」

「・・・」「ごめん」

何も言っていないのに謝られた

真人はちよつと気分ですになつてみた

「靴舐めろ」「それは絶対やだ！」

全力で否定された

てかここで普通の反応された

「なあ、寿司食いたくね？」

「蟹どこ行つたWW」

確かにそうだが

「蟹風味のやつあるじゃん」

「それが食いたいのか？」

むしろそれしか食べない

「コレステロールの宝庫だな」

お前は、芸能リポーターか

「カロリー高いよ？」

それは知ってる

「他に食べたいのは？」

「・・・海老」

「結局甲殻類だな」

第4話「留守番」

続く

第四話『留守番』

時計をみる真人、今A m 1 0 : 0 0

「あゝあ暇だなあ」

今日、留守番を任された

家には一人しかいない

「よし！あいつを呼ぼう！」

あいつなら来てくれると信じる

3 0 分後・・・

「お邪魔します」

啓太が来た

「チツ、邪魔するなら帰れ」

「来てやったのにその仕打ち！？」

「何玄関で突っ立つてるの？早くあがりなさいよ／＼」

「なぜ照れてる！？」

「会いたかったから呼んだんじゃないんだからね」

「ツンデレだとー！！」

前戯はこれくらいにして家にあがらせた

真人は

「今日、なにする？プロレスやっとく？」

「なんで家でプロレスなの！？」

「軽く汗流そう」

「確実に重いよね」

「じゃあ、グローブがないボクシング」

「もはや、ただの殴り合い！」

「ゴッドフィンガー！！！」

説明しよう「ゴッドフィンガー」とは、ゴッドガンダムが使用するいわゆる必殺技みたいなものである

啓太の頭をわしずかみにする真人

「ちぎれる、頭がちぎれる！！」

叫ぶ啓太。

しかしまだ真人は、止まらない

「トドメのヘッドロック！！」

「ぎゃああああああ！！」

猫がビツクリしたような声で気絶した

「名無阿弥陀仏」

「死んでねえよ！！」

それぐらいわかってる

殺人者になりたくないし

つか回復はやいな

「今後ふざけたらまた死ぬことになるぜ」

「勘弁してよ・・・」

だるそうに答える啓太

「貴様死にたいのか！」

「ふざけてませんけど！？」

「俺がふざけてみた」

「それに対してふざけるな!!」
啓太に怒られた

「にしても腹減ったな・・・」

お腹を押さえる啓太

「まだ11時だぞ？」

「朝飯抜いてきたんだよね」

それはお腹減るな

親切な真人は

「飯をつくつてやるよ」

「俺、炒飯がいいな」

「りょーかい」

といって台所に向かう真人

さて炒飯の材料あつたかな？

炊飯器の中をみた

米が一人分しかなかった

俺の分がない・・・

次に冷蔵庫をみた

卵は、あるな

炒飯の元もあつた

これ冷やす必要あるのか？

次にフライパンを温めて・・・

「まだー？」

うるさい男だ

ほつといて、次に・・・

「おーい」

「ちよつと黙れ」

「ごめん・・・」

しょんぼりしてる

どんだけお腹減ってるんだよ・・・

と、やりとりしてる間にあつたまつた

フライパンに米をぶち込んで卵ぶちまけて炒飯の元をあえて丁寧にいれた

だんだんと焦げていくお米

ダークマターができた

炒飯のはずが見た目焦げた卵焼きになった

米もないから作り直せない

面倒なので啓太にだした

「なにこれ？俺卵焼きなんて頼んでないよしかもガッツリ焦げてるし」

「それが真人流炒飯だ。啓太にしかださない天下一品の料理だ」

「それ自分で言っただけで恥ずかしくないの？」

「／／／」

「いまさら！？」

とか言いながら炒飯を口に持っていく啓太

「ん？」

どんどん炒飯を口に持っていく

「これは！？」

「どうした啓太！うまいのか！？」

「味がしない・・・」

な・・・んだと

「そんな馬鹿な」

といつて真人も炒飯を口に持っていく

・・・

時が流れていく

どうゆうことだ？

味が本当にしない

あるのは食感だけだ

素材の味はどこにいったのだろう・・・

しかし余らせるのも勿体ないのでラップをかけて冷蔵庫にしまった
後で妹に食べさせよう

P M 1 : 0 0

啓太は

「あの炒飯に名前をつけようぜ」

ある意味暇つぶしになりそうだな

真人は

「ドラゴン炒飯」

「よし、今から真人の事を中二病と呼ぶ」

お前ほど中二病だとないとおもうが・・・

「じゃあ、卵焼き炒飯」

「別々にしたほうがいい」

「黒歴史炒飯」

「ある意味黒かった！」

「ツツコミ所満載炒飯」

「名付け親がツツコミ所満載だわ」

うるさい男だ

「啓太はあるのか？」

「ない」

即答された

「無いなら名前つけようとか言うな」

「もうツツコミ所満載炒飯でよくね？」

決まった

しかも暇つぶしが10分で終わった

真人はやらないといけない事を思い出した

「レベル上げしなきゃ」

「中二病だなW」

自分でも中二病だともった真人

「啓太も手伝え」

「なんのゲーム？」

「テイルズ」「やる」

即答だった

啓太は、テイルズ信者だった

「なあ、真人」

不意に啓太はこう言った。

「最初からゲームでよかったんじゃない？」

「はは、ははははは」

そこには、微笑する涙目の少年がいた
真人だった

続く

次回第5話「睡魔」

第五話『睡魔』

4時にケータイのアラームがなる

「ふあゝゝ」

盛大にあくびをする真人

今日は、朝5時からみんなと会う約束があるのだが

「流石に4時は、早過ぎるだろ・・・」

と愚痴ってみるも状況は変わらず

暖かいベッドから布団をはいで糞寒い世界に入る

天国と地獄だな

「兄ちゃん起きろゝ！」

朝から騒々しい奴一号が現れた
更に追い撃ちをかけるように

「真人ゝ起きろゝ！」

騒々しい奴二号が現れた
ちなみに一号が妹で二号が姉貴だ

「お前ら朝からうるさいな」

「起こしてやったのにその態度はなんだ弟よ」
確かにそれはありがたいがもう起きてたし

「兄ちゃん今日、お土産よろしくね」

「お前にやるお土産はない」

「じゃがりこがいいな」

無視された

「だいたい、なんであんたらは、なぜこんなに早いんだ？」

「暇だった、気付いたら朝でした」

見事にハモった

「なら寝てろよ」

「まあ、ゲームしてたのもあるがな」

姉貴は誇らしげだった

「私は、それをみてた」

「そんなにハマったか？」

最近真人が購入したゲームを三日前からやりだしていたこの姉妹なのだが・・・

「今どれくらい進んだ？」

「ラスボス前」

簡単に言われた

「プレイ時間は？」

「66時間」

「ちよつとまで」

計算するぞ

一日が24時間で三日前からやってるから

$24 \times 3 = 72 - 66 = 6$

$6 \div 3 = 2$

こいつら一日にたった2時間しか寝てない

「しかも私達は、三日間絶食だ」

よくやってくれたな

「おかげでお腹がぺこぺこだよ」

どころではないと思う

「あと買い物してないから朝ごはんぬきだ」

「となると、コンビニだな」

と言って身支度を済ませコンビニに行こうとするが

「ちよつとまてえい」

止められた

「なんなんだよ」

「私達の分も頼みたいな」と思つて」

財布の中を見る真人

・・・うん。キビシイなあ

「お前ら、何食いたい？」

姉貴は

「おにぎりでもいいよ」

優しいなあ

と思つた次の瞬間

「全種類で！！」

前言撤回

つか腹減つてゐるからって・・・

「私は、ポテチのBIG BAG」

妹はガッツリお菓子だった

朝からお菓子って

「まあ、できるだけ買つてくるよ」
と言つて家を後に行つた真人

お金大丈夫かなあ・・・

数分後・・・

「ただいま」

家に帰った

とりあえず買ったものを渡そう

そう独り言をいいながら姉貴の部屋に行く

妹と寝てた

しかもゲームつけっぱなしで

最悪だなこいつら

腐るのが勿体ないので起こしてみる

とりあえず肩を叩く

起きない

体を揺さぶる

起きない

こうなったら・・・

ここで秘奥義の構え！

「右手にお玉を、左手にフライパンを、奥義！死者の目覚め！」
と、叫びながらガンガンと音を響かせる

我ながら頭がおかしくなる音だ！

流石にビックリしたのか姉貴は起きた

ただ寝ぼけていたのか

「なんだ、ただの真人か」
といってまた寝ようとする

ただの真人って何？

と思いながらも一回秘奥義をかました

次は、妹が起きた

やはり寝ぼけている

「目があゝ目があゝ」

何が？

つか絶対夢の中ラピユタだったろ

妹の「目があゝ」で姉貴が起きた

「おにぎりは？」

「ちゃんと買ってきましたよ」

て言っておにぎりを渡す

「ありがとう」

と言っておにぎりに無我夢中で食べる

20個ほどのおにぎりが2分で終わった

「よし寝る」

と言って寝だした

太らない事を祈ろう

次に妹が

「私のポテチ、ポテチ！、ポテチ！！」

と叫ぶ妹

とりあえず落ち着け

「だからちゃんと買ってるって」

ポテチを袋からだす

それを何も言わず妹は奪い取りすぐにポテチの袋をあけこいつも無
我夢中に食べる

・・・こいつら恐ろしいな
と思いながら時計をみる

4:30

もう時間だ

「俺もう出かけるよ？」
と言いながら妹をみる

・・・ポテチを食いながら寝てやがる
かなり幸せそうな顔で

「憎たらしい顔しやがって」

と微笑しながらも二人に布団をかけてあげる

「よし行くか」

といったら二人が

「「いつてらっしゃい・・・zzz」」

寝言だった

時間がもうないので家を出る真人

「次は、あいつらか・・・」

と言いながらあくびを噛み締めながらもみんなの所へ向かった

続く

次回第6話「議論」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7022p/>

暇人が暇になった時の暇つぶし

2011年10月7日20時40分発行